

一連の大学改革と教授の多様性拡大に関する一考察 ～研究者の属性と昇進に関するイベントヒストリー分析～

文部科学省 科学技術・学術政策研究所 第2調査研究グループ 主任研究官 藤原綾乃

要旨

本研究では、研究者データベース (researchmap) を用い、日本の大学に所属する研究者の研究業績や属性、経験等が昇進に与える影響についてイベントヒストリー分析を用いた実証分析を行った。人文社会学系、理工系、医学・生物系の研究者を対象とし、昇進に影響を与え得る要素として、研究業績、社会的要素、経験的要素の3カテゴリを設定した。具体的には、研究業績には、論文数や書籍数、受賞数、競争的資金獲得件数などが含まれ、社会的要素には性別や共著者数、所属学会数など、経験的要素には大学以外での勤務経験の有無、組織間移動の回数、海外の大学での留学・勤務経験などが含まれる。

分析の結果、すべての学術分野において、論文や書籍、競争的資金の獲得件数は教授昇進にプラスの影響を与えていることが明らかになった。特に、競争的資金の獲得件数は、人文社会学系をはじめとするすべての分野において教授昇進に有意に強力な説明力を有することが明らかになった。一方で、受賞歴は理工系や医学・生物系でのみプラスに働くなど、学術的パフォーマンスの評価は分野により異なる要素が複数あることも明らかになった。さらに、本研究では、日本のアカデミアにはマチルダ効果(女性研究者の過小評価)が存在することも明らかになった。分析の結果は、女性研究者は男性研究者と比較して、人文社会学系では20%、理工系では50%、医学・生物系では30%も教授になる確率が低いことを示している。本研究ではさらに、交差項を含めたモデルを用い、大学改革の成果についても分析を行っている。分析の結果、女性研究者の活躍促進に関しては、大学改革始動の前後で、係数が負から正へと変化したものの、統計的に有意な結果ではなく、政策効果という観点からは大きな変化をもたらさなかったと推察される。一方で、大学以外での勤務経験を有するなど多様なバックグラウンドを持つ研究者の活躍促進に関しては、統計的に有意に係数が負から正に変化していることが明らかになった。このことは、以前は民間企業など大学以外での経験は昇進において不利に働いていたが、近年ではプラスに評価されるよう変化したことを示唆しており、多様なファカルティ人材の確保という政策の効果が現れていると考えられる。本研究の成果が、大学に所属する研究者のみならず、研究者人材のマネジメントに係る政策立案者においても、その戦略策定において資すれば幸いである。

A consideration on the series of university reforms and expansion of professor's diversity:
Event history analysis on characteristics of researchers and promotion

2nd Policy-Oriented Research Group, National Institute of Science and Technology Policy (NISTEP),
MEXT

Ayano Fujiwara

ABSTRACT

In this research, I analyse the factors necessary for a researcher to become a professor in the humanities and sociology, science and engineering, and medical and biology fields. In the present study, I divide the necessary factors for promotion into three categories. The first is academic performance, which includes factors such as number of articles and number of competitive grants and funding sources acquired, the second includes social elements such as sex and number of co-authors, and the third includes experimental elements such as work experience outside the university and mobility experience between different institutions. The results indicate that compared with male researchers, female researchers' odds of becoming a professor are approximately 80% in humanities and sociology, approximately 50% in science and engineering, and approximately 70% in the medical and biology fields. However, the Japanese government has been promoting university reform since 2004, and a comparison of the results before and after 2004 reveals that the explanatory power of academic performance factors and social elements has declined and that the factors that influence promotion are changing to emphasize experimental elements.